

映画が映し出す格差社会

— 『パラサイト 半地下の家族』から読み解く『万引き家族』の世界—

丁 貴 連・鈴 木 アリサ¹

はじめに:「寄生する家族」を描いた2つの映画

2018年5月、第71回カンヌ国際映画祭において、是枝裕和監督の『万引き家族』（2018）が最高賞であるパルム・ドールを受賞した。本作品では、生きていくために高齢者の年金に頼り、万引きをする日本の貧困層の家族が描かれている。翌年、同賞をポン・ジュノ監督の『パラサイト 半地下の家族』（2019）が受賞した。本作品は半地下に暮らす貧困層の家族の物語であるが、2020年第92回アカデミー賞授賞式にて最優秀作品賞を含む4部門で受賞を果たすなどの栄誉を手にした。

2年連続で「家族」を描いたアジアの映画がカンヌに選ばれたわけだが、両作品とも、格差社会という背景で罪を犯す家族の姿が描かれている。

『万引き家族』は、誰一人として血縁関係のない人たちが家族のふりをして暮らしているところからはじまる。父の治は日雇い労働を、母の信代はクリーニング工場でパートを、叔母の亜紀は風俗で働くが、いずれも安定せず、生活の大部分を万引きと、祖母の初枝の年金に寄生して生活する。子どもの祥太は、児童虐待から保護されたため（世間ではこれを「誘拐」と呼ぶが）、学校には行けず、父親から万引きを教わって育てられる。ある日児童虐待から幼い女の子りんを保護（誘拐）してしまうことで、家族の日常は変化する。

この物語で家族が犯す罪は多い。万引きから始まって、誘拐（保護という意図であって）、車上荒らし、そして死体遺棄及び年金の不正受給にいたる。犯罪の理由は貧しさである

ことは紛れもない事実だが、映画はなぜ彼らが貧しいのか、ということを目視化している。是枝監督は、ポン監督との対談において、制作意図を以下のように話す。

ポン：これまで（是枝監督が）家族をテーマにした作品を多く撮られていますが、今回は（以前の作品に比べ）より本格的に日本や社会のシステム、その境界線で衝突する領域に拡張されていると思います。

是枝：（前略）少し視点を高く持って、社会の中で家族というものが今どういうふう解体されていくのか、というような（中略）血縁のない彼らが犯罪で繋がって集まった時に、私たちの家族観だったり、私たちの正義観だったり、この家族を解体に導いてしまうという、（中略）そこは最初から思っていました²。

（下線は筆者）

犯罪で繋がった背景には、児童虐待、DV、独居老人など、社会から排除された人々の問題がある。祖母の初枝の家と年金に寄生せざるを得なかった家族の事情は、すなわち現在の日本社会が抱える課題であり、それに加えて家族観や正義観を見直すことを目的としている。キム・ギョンファ氏は本作品の日本国内の興行が成功的だったとしながらも、「映画の中に描かれた年金の不正受給や児童貧困問題が社会的な

¹ 宇都宮大学大学院 地域創生科学研究科 博士前期課程。

² 「日韓から『家族』を描く 是枝裕和×ポン・ジュノ」（日本映画専門チャンネル、2019年10月12日放送）。

アジェンダとして扱われることは起きなかった³』と指摘している。

是枝監督の制作意図は現代日本社会が抱える問題と家族、と明確だったわけだが、それに比べて国内の受け止め方は消極的で、一部では否定的でもあった。

一方、ポン監督が手がけた『パラサイト 半地下の家族』は、裕福な家族と貧しい家族を対称的に映し出すことをメインとして物語を膨らませた。本作品は、韓国の半地下住宅⁴に住み、時々ピザボックスを折りたたむなどの副業をするが実質全員無職の貧しい家族（父キテク、母チュンスク、長男キウ、長女キジョン）がメインとして登場する。貧しい家族（以下半地下の家族）の長男はある日名門大学に通う友人から社長家の子の家庭教師のアルバイトを紹介され、大学に通っていないに関わらず、名門大の学生のふりをして家庭教師として雇われることに成功する。長男の詐欺劇はやがて、長女、父、母、までもにすることになり、一家は全員身分を偽装して社長家に雇われる。

つまり、半地下の家族が社長家に寄生する物語である。しかし実は社長家に寄生していたもう一組の貧しい夫婦の登場により、半地下の家族の計画は崩れていく。ポン・ジュノ監督が本作品を「（所得格差の）両極化⁵を扱った映画⁶」であるとするように、韓国の格差社会を象徴的に表した。日本の『万引き家族』と同様

に家族を描いているが、血縁関係の家族であり、他の家族も登場するという点で異なる。

祖母の家と年金に寄生する『万引き家族』と金持ちのお金と暮らしに寄生する『パラサイト 半地下の家族』は、非常に似ている。しかし、出来上がった作品を見ると全く違う格差社会が浮き彫りになる。

そこで本稿では、似て非なるふたつの映画、『万引き家族』と『パラサイト 半地下の家族』において、「寄生」と「家族」という共通要素を手がかりに比較・分析することで、それぞれの国が抱える問題とその背景に迫り、浮き彫りになった日韓の格差社会と向き合うことを目的とする。

I. 生きるための選択「寄生」

1. 日本：年金の不正受給

『万引き家族』では、父親の治が日雇い労働者として、母親の信代がクリーニング工場パートを、叔母の亜紀は風俗で働いているが、3人の収入は不安定なものである。そのため万引きを日常的にするほか、基本的におばあちゃんの初枝の年金が生活の支えになっている。

初枝：年寄りの年金当てにして…甲斐性なし！

治：うるせえ⁷

（『万引き家族』劇中）

半ば冗談口調だったが、住むところもお金も初枝に頼りっぱなしの生活はいつまでたっても変わらない。ただでさえ苦しい生活を送っていたのに、父親の治は怪我をして働けなくなるどころか労災も下りず、母親の信代はパートを解雇されてしまった。そんな中初枝が息を引き取った。

3 キム・ギョンファ「[同じ日本、違う日本]『社会派』不在の日本映画界に自省のきっかけ、ポン・ジュノの『寄生虫（原題）』」([같은 일본, 다른 일본] 『사회파』 부재의 일본 영화계에 자성의 계기, 봉준호의 『기생충』) 『韓国日報』(2020年2月19日付) <https://m.news.zum.com/articles/58207367> (2021年12月15日最終閲覧)。

4 「半地下」という言葉どおり、韓国には地上と地下の間にまたがる住宅がある。

5 貧富の格差を、韓国では社会両極化または両極化と表現する。

6 「봉준호 감독 “『기생충』은 양극화를 다루는 영화” (ポン・ジュノ監督「『寄生虫（原題）』は両極化を扱う映画」) 『毎日経済』(2019年5月21日付) <https://www.google.co.jp/amp/s/m.mk.co.kr/star/hot-issues/view-amp/2019/05/334323/> (2021年12月20日最終閲覧)。

尚、
() 内は筆者が補足。

7 『万引き家族』(2018) AOI Pro. (以下同)。

治：どうする、葬式とか、火葬場とかよ

信代：そんなお金ないよ

治：でも、お前…

信代：いや、もうちょっとそばにいてあげよ

うよ、ねえ？おばあちゃんも寂しいでしょ？

治：え、いや、お前…

(『万引き家族』劇中)

気が動転している治と違って信代は冷静で、現実的な判断をする。初枝の死亡が確認されれば、年金をもらえないどころか、家にも住めなくなる。家族が生きていくためにはモラルなどを気にしている場合ではなかった。今まで初枝に寄生していた家族は、初枝の遺体を家の床下に埋め、年金を受給し続けることを選ぶ。

実際、家族の遺体を遺棄し年金を不正受給する事件は、昔から現在まで起こっている⁸。2010年、東京都足立区の民家で戸籍上111歳の男性の（少なくとも死後30年は過ぎていた⁹）遺体が見つかり、当時80代の長女と50代の孫が逮捕された。2人は不正に受け取った年金を、生活費や自宅の修繕費、証券取引などに使っていたという¹⁰。

本作品の設定と小林政広監督の『日本の悲劇』（太秦、2013年）は、この事件がモチーフとなっているが、11年が過ぎた現在も同様の犯行が全国各地で起きており、逮捕された人たちは取り調べに対し、「年金を受け取ろうと思い、母親の遺体を放置していた。年金は生活費

などに使った¹¹」、「母の年金が止められたら生活できなくなると思った¹²」などと供述している。

東京都足立区の事件で年金の不正受給の問題が明るみになった2010年、もはや家族ではなく一人一人が孤立している状況を表す言葉が登場した。「孤族」である。単身化、高齢化が加速し、日本は「個人を単位とする社会¹³」に変化した。「個」を尊重したまではよいものの、血縁や地縁に頼ってきた従来の生き方が通用しなくなり、その結果孤立する「孤」が増えてしまったのだ。

初枝は本来、独居老人である。民生委員との会話で博多にいる息子の存在が明らかになっているが、疎遠になり何年も音沙汰がない。家族がいても「孤立」していて、まさに孤族の時代を生きる高齢者だ。孤独だった初枝は、次々と孤立した人々を自分の家に迎え入れた。家族が崩壊する孤族の時代に、初枝は自分の「家族」をつくったのだった。

朝日新聞の取材に応じた孤独死した男性の遺族が「けんかでも相手がいた方がいいな。一日口聞かないの、つらいな¹⁴」という生前の男性の言葉を回顧するように、たとえ年金を当てにされていたとしても、孤立するよりは良いという気持ちが映画に映し出されている。家族が自分の年金に寄生していても、結局はお互いの存在しか頼るものがなく、年金の不正受給の問題は、受け取る家族だけの問題ではないことを物語っている。

小林監督の『日本の悲劇』（2013年）では、高齢の父親が息子に、年金を残してこの世を

8 筒井富美「万引き家族よりヤバイ"年金タカリ家族"「寝たきりの親」を飯のタネにする」『PRESIDENT Online』（2018年6月8日付）<https://president.jp/articles/-/25364>（2021年11月14日最終閲覧）。

9 「111歳男性、実は30年前に死亡？足立区でミイラ化遺体」『日本経済新聞』（2010年7月29日付）https://www.nikkei.com/article/DGXNASDG2901S_Z20C10A7000000/（2021年11月14日最終閲覧）。

10 「足立の「111歳」事件、長女・孫を逮捕 年金不正受給の疑い」『日本経済新聞』（2010年8月28日付）https://www.nikkei.com/article/DGXNASDG2704Q_X20C10A8CC1000/（2021年11月14日最終閲覧）。

11 前掲紙（註9）。

12 「「年金止まったら生活できない」母の遺体放置、遺棄容疑で65歳息子逮捕」『産経新聞』（2020年11月10日付）<https://www.sankei.com/west/news/201110/wst2011100005-n1.html>（2021年12月9日最終閲覧）。

13 真鍋弘樹「孤族の国 家族に頼れる時代の終わり」『朝日新聞』（2010年12月26日2面）。

14 「孤族の国 第一部男たち」『朝日新聞』（2010年12月26日2面）。

去ってしまう。本作品は国際映画祭でも上映されていたが、日本国内で大きく注目を集めることはなかった。『万引き家族』は、カンヌ国際映画祭でパルム・ドールを受賞したこともあり、年金の不正受給の問題が改めて人々の目に映ったわけだが、この背景にある孤立した人々の存在が忘れ去られているように思えてならない。

NHKスペシャルで放送された『消えた高齢者“無縁社会”の闇』（2010）では、年金を不正受給した当事者にインタビューを行っている。ヒロシさん（仮名）は、父親の遺体を放置したまま、7ヶ月間に渡って年金を不正受給し、有罪判決を受けた。彼は28歳の時、母親が病気で倒れたことをきっかけに仕事を辞め、その後、母と妹が病気で相次いで亡くなり、ヒロシさんは認知症の父親と2人暮らしになる。生活保護も持ち家があるという理由で受けられず、警察や近所にも「頼れる人がいない」と相談するなど、助けを求めたりもしたが状況は変わらなかった。そして、父が亡くなった。

ヒロシさん：もうダメだと思った。ここでお父さんが死んだら年金止まっちゃう、ほら、連絡すると（死亡届を出す）止まっちゃうから…家のローンもあるし、葬式も出せないし…何回も言ってるように、頼る人もいないわけだから、ああするしかほんとなかったの¹⁵

（下線は筆者）

社会から孤立した親子は他に頼ることができず、親をなくした子は完全に一人きりになった。孤立するということは、すなわち生きることが制限されるということだ。年金の不正受給の事件におけるすべての当事者が、同じ事情を抱えているとは言えないが、「誰にも頼れな

い」という孤立した状況は共通していると考えられる。助けを求めても救われず、そもそも助けを求められない人々もいるだろう。この頃、50代の引きこもりの子どもを80代の親が支える「8050」問題なども挙げられるが、彼らもお互い（親子）の存在が全てで、他に頼ることができないところが共通する¹⁶。

映画の家族は皆、血縁関係のない他人の集まり（特に子どもは誘拐してきた子ども）であるため、頼りたくても頼れないのではなく、彼ら自身で生きていくために誰にも頼ってはいけないう状況が作りだされてしまった。実際、孤立死する事件においても「他人とのつながりを拒絶するように、閉じこもって暮らしていることが多い¹⁷」という。

地域や社会から見放された彼らは、それが普通になってしまい、その中でなんとか生き延びようと万引きや年金の不正受給をするにいたった。死体を遺棄または放置し、年金を不正に受給する事件はもはや珍しくないが、その背景の孤立する社会、「孤族の国」に目を向けるべきである。

2. 韓国：金持ちへの詐欺

『パラサイト 半地下の家族』で、無職だった半地下の家族は、息子のキウと娘のキジョンの悪知恵のおかげで、全員が裕福な社長家で働くことになる。彼らはどのようにして社長家に就職できたのだろうか。

まず、キウとキジョンはともに浪人生である。キウは計4回も大学受験をしているが、ことごとく落ち続けている。就職も、大学卒業といういまや当たり前の前提条件がつくため、高卒のキウとキジョンにとっては程遠い夢であ

16 池上正樹「父の遺体放置に年金不正受給で逮捕、「引きこもり」58歳息子の複雑な胸中」『DIAMOND online』（2020年8月7日付）<https://diamond.jp/articles/-/245183>（2021年12月9日最終閲覧）。

17 前掲紙（註14）。

15 『NHKスペシャル 消えた高齢者“無縁社会”の闇』（NHK、2010年9月5日）。

る。そして韓国では、大学に進学できていない高卒無職者が年間約10万人いる¹⁸という現実がある。

ある日、キウの元に名門大に通う友人がやってきて、裕福な社長家の家庭教師のアルバイトの紹介を受ける。社長家ということもあり、キウは高卒で貧しい身分の自分が雇ってもらえないと考えたのだが、妹のキジョンと手を組み、名門大の在学証明書を偽造して、見事社長家に就職する。

春木育美氏は、学歴社会の韓国における教育について「階級上昇または維持のために最も重要な手段である¹⁹」と説明するが、学歴はその人の身分を測る尺度である。子どもの学歴は親の所得水準に比例するという研究結果も出ているように²⁰、学歴が高いほど裕福である確率が高く、キウが偽造した名門大の延世大学も、在学生の約半数の家庭が高所得層である²¹。

名門大に通うキウの友人が、高額なアルバイトをしている時に、キウとキジョンは高卒で無職だったが、これは、持つ者だけが富み、持たざる者は貧しいままの階級社会であることを物語っている。

社長家の奥さんのヨンギョに、自身の学歴を騙すことに成功したキウは、続けて社長家の末っ子の家庭教師として留学経験のある知り合いの後輩、として妹のキジョンを紹介する。キウとキジョンは完璧な仕事ぶりで信頼を得たと

ころで、次の計画に移った。キジョンは社長家の運転手に濡れ衣を着せて辞めさせ、知り合いのベテラン運転手という嘘をついて、父のキテクを紹介する。

次に、キテクは社長家の元々いた家政婦を辞めさせ、知り合いのVIP顧客専門サービス業者、として妻のチュンスクを紹介した。社長家の人々は、新しく雇った4人が家族であるという事実を一切知らない。そうして無職だった彼らは、学歴と身分を偽り、裕福な家で働くことになった。

金持ちの家に寄生することに成功した半地下の家族は、悲惨な終わりを迎えた。娘のキジョンは、もう一つの貧困層の夫婦に殺され、父のキテクは雇用主であるパク社長を殺したのだ。なぜこのような最悪な結末になってしまったのか。

半地下の家族は社長家のお金のみならず「階級」にも寄生していた。お金の偉大さを味わってしまった彼らは、階級の上昇を常に夢見ていた。入試にことごとく落ち続けてもなお、名門大の入学を夢見るキウや、社長家族が家を空けた際に、半地下の家族がまるで自分たちの家であるかのように豪邸でくつろぐ姿からは、階級上昇の欲望が垣間見える。

イ・スジョン氏は「(半地下の) 家族の嘘が発覚して露わになることは(嘘をついたという) 事実ではなく彼らの階級²²」だと分析しているように、韓国の階級社会を映し出していることが分かる。嘘の肩書きで、階級上昇の錯覚に陥っていた彼らは社長夫婦の会話で自分たちの位置を自覚する。

18 安宿緑『韓国の若者—なぜ彼らは就職・結婚・出産を諦めるのか』(中公新書、2020年) 35頁。

19 春木育美『韓国社会の現在』(中央公論新社、2020年) 141頁。

20 チェ・ピルソン、ミン・インシク「父母の教育と所得水準の世代間移動性と機会不平等と与える影響」(부모의 교육과 소득수준이 세대 간 이동성과 기회불균등에 미치는 영향) (東國大 学校『社会科学研究』第22巻第3号、2015年) <http://www.dbpia.co.kr/Journal/articleDetail?nodeId=NODE06527108#none> (2021年12月4日最終閲覧)。

21 ホン・ソクジェ「階級移動はしごと揺れたか…SKY在学学生半分が高所得層」('계층 이동 사다리' 흔들렸나…SKY 재학생 절반이 고소득층) 『한겨레』(2018年10月29日付) http://www.hani.co.kr/arti/society/society_general/867774.html#csidx403a41f8641d4b0ac1797ace8a3e27d (2021年12月1日最終閲覧)。

22 イ・スジョン「〈설국열차〉와 〈기생충〉에 나타난 계급모순의 극복방식 - 프레드릭 제임슨의 서사이론을 중심으로 -」(〈스노우피어サー〉와 〈파라사이트〉 半地下の家族) に現れた階級矛盾の克服方式—フレドリックジェームソンの叙事理論を中心として—(芸術科メディア学会、19巻1号、2020年) 68頁、拙訳、括弧は補足。

パク社長：待てよ、どこからかあの匂いがするな
ヨンギョ：なんの匂い？

パク社長：キム運転手（キテク）のsmell

（中略）

ヨンギョ：なんの匂いかしら

パク社長：さあな、とにかく言葉では表現でき
ない…時々地下鉄に乗ったら嗅ぐ匂
いかな

ヨンギョ：知らない、もう長いこと地下鉄に
乗ってないから

パク社長：地下鉄に乗る人たちの特有の匂いが
あるんだ²³

（『パラサイト 半地下の家族』劇中、拙訳）

社長家族は「匂い」を通して彼らとの階級を
識別していた。半地下住宅に暮らしていること
までは分からなくても、裕福な人からはしない
地下特有の匂いに気付いていたのだ。パク社長
はあくまでもキテクの話をしていただけだが、当
時韓国国内の多くの観客が侮辱されたと感じた²⁴。

2020年の首都圏の地下鉄の1日にあたりの利
用客は平均541万9368人で²⁵、地下鉄はもはや
人々の日常に必要不可欠な移動手段となっている。
パク社長は自分よりも身分の低い人々を
「地下鉄に乗る人たち」と一括りに呼んだこと
で、階級差を強調した。また、2015年時点で半
地下住宅に暮らす人口は約86万人²⁶と推定され
ているが、映画を見た後に匂いを気にするよう

になった人も多いという²⁷。嘘で階級を偽ること
ができて、匂いは偽れない。

春木育美氏は、韓国国民が国を「ヘル（地
獄）朝鮮」と呼ぶことについて「身分が固定し
た朝鮮時代のように、現代韓国は階級上昇機会
が閉ざされた不条理な社会であると強調するた
めである²⁸」と説明するが、階級上昇を夢見る
人々は、それが単なる夢に過ぎず不可能に近い
ことをよく知っている。そのことを知りながら
も、富裕層への憧れが、やがて捨てられない欲
望へと変わる。

半地下の家族の社長家に対する憧れは以下の
会話からも分かる。

キテク：この家族は本当によく騙されるなあ？

チュンスク：奥さまが特にあれよね

キテク：そうだ、奥さまが本当に純粋だ…優し
いし…金持ちなのに、優しい…

チュンスク：「金持ちなのに」優しいんじゃない
くて…「金持ちだから」優しいの
よ。わかる？はっきり言って、こ
の家のお金が全部私にあってみな
さい、私はもっと優しいわ！

（『パラサイト 半地下の家族』劇中、拙訳）

妻のチュンスクは、お金さえあれば優しくな
れる、という富裕層の心の余裕を羨ましく思っ
ている。2018年にtvNで放映されたドラマ『マ
イ・ディア・ミスター～私のおじさん～』にお
いても同じようなセリフが出てくる。本作品
は、現代の韓国社会を生きる貧困層の20代の女
性ジアンが主人公であるが、彼女は以下のよう
に話す。

23 「기생충」(パラ사이트 半地下の家族)(2019) Barunson E&A (以下同)。

24 カン・ジュファ 「[세상만사-강주화] 지하철 냄새 나는 사람들」(「世界万事-カン・ジュファ」地下鉄の匂いがする人たち) 『国民日報』(2019年5月31日付) <http://m.kmib.co.kr/view.asp?arcid=0924081083> (2021年12月9日最終閲覧)。

25 パク・ヨンベ 「ソウル交通工事、「2020年輸送人数分析結果」発表…輸送人数27%減少」(서울교통공사, 「2020년 수송인원 분석결과」 발표...수송인원 27% 감소) 『The Drive』(2021年1月28日付) <https://m.thedrive.co.kr/news/newsview.php?ncode=1065586637929817> (2021年12月3日最終閲覧)。

26 春木育美(註19) 239頁。

27 ユン・インギョン 「기생충: 반지하에 사는 청년들」(寄生虫(原題): 半地下に暮らす青年たち) 『BBC ニュースコリア』(2020年2月8日付) <https://www.bbc.com/korean/news-51320987> (2021年12月1日最終閲覧)。

28 春木育美(註19) 179-180頁。

ジアンのお祖母：いい人でしょ？優しそうな人だわ
ジアン：裕福な人たちがいい人になるのは簡単
よ²⁹

（『マイ・ディア・ミスター～私のおじさん～』
第5話劇中）

生きていくことで精一杯の庶民の気持ちを富裕層が分かるはずがない、といったところだろうか。映画でも、ドラマでも、お金がないと優しくなれない、あるいはお金があるから優しくなれる、と感じてしまう貧困層の富裕層に対する気持ちが現れている。

また、お金や権力があっても、独り占めにしたり、乱用したりする事件もしばしば見かけることから、一般にお金持ちに対する印象はあまり良くない。数年前に韓国全体を騒がせたチョン・ユラ氏の不正入学の事件において、チョン氏が「お金も実力だ」などとSNSで呟いてしまい、多くの国民が憤慨した³⁰。

物語のクライマックスで、パク社長は、地下の夫婦の夫、グンセの身体からする匂いに耐えられず鼻をつまんだ。その様子を見たキテクはグンセに自分の姿を重ねて怒り、パク社長を殺害してしまう。お金だけでなく、心の余裕や、匂い、など全てにおいてまるで別世界で生きる富裕層に憧れつつも、階級は絶対超えられない社会への怒りが滲み出ている。

3. 「寄生」にいたった背景

不正受給や詐欺など、両作品ともに登場人物がしたことは紛れもない犯罪であるが、それらは同時に苦しい状況を生き延びるための手段であった。社会や地域から見放され、さらにはその状況に慣れてしまった『万引き家族』と、叶うことのない階級上昇という夢をみる『パラサ

イト 半地下の家族』は物語がフィクションであっても、決して架空の設定とはいえない。見えていないだけで、実際は周りにいたり、もしかしたら当事者になるかもしれない、そういう現実を映し出している。映画に描かれた「寄生」を探ることで、家族が崩壊して「孤族」に変化した日本社会と、貧富の格差は乗り越えられなくても血縁の家族で支え合う韓国社会の背景が浮き彫りになる。

II. 変わりゆく「家族」のかたち

1. 日本の崩壊家族

祖母の初枝の年金の「寄生」にいたった背景に「孤族」の社会があることがわかったが、『万引き家族』の家族（血縁関係のない人々）は一体「何」で繋がっていたのだろうか。

実の母親から虐待を受け、前夫から暴力を振るわれて生きていた信代は、風俗で働いていた。店の常連客だった治は信代の境遇を知って、2人で信代の前夫を殺害した。

独居老人だった初枝は全ての事情を知った上で、2人を受け入れた。信代は虐待とDVから救われ、治は前科持ちの暗い人生から救われ、初枝は孤独から救われた。3人は自分たちが救い救われたように、どこにも居場所がなかった亜紀と、実親から虐待を受ける祥太とりんを保護した。家族から、地域から見放されていた彼らはそうして新たな家族を形成した。

治と信代がりんを保護（世間では誘拐）した2ヶ月後、りんの行方不明が全国的に報道され、家族はりんを選択を委ねた。しかし、りんは新しい家に居続けることを選んだ。

初枝：ねえ、戻るって言うと思ったんだけどね

信代：うん…選ばれたのかなあ、私たち

初枝：親は選べないからね、普通は

信代：でもさ、こうやって自分で選んだ方が強いんじゃない

29 『マイ・ディア・ミスター～私のおじさん～』（2018）スタジオドラゴン。

30 金敬哲『韓国 行き過ぎた資本主義—「無限競争社会」の苦悩』（講談社現代新書、2019年）115-116頁。

初枝：何が

信代：何がって…絆よ、絆

初枝：私はあんたを選んだんだよ

(『万引き家族』劇中)

彼らは救い救われた関係であったとともに、互いを選んで作られた家族だった。血縁関係は選べないだけでなく、幸せであるとも限らない。極端な例でいうと、治のように貧しく生まれれば貧しく育ち、信代、祥太、りん、のように無責任な親のもとに生まれれば虐待を受ける。初枝や亜紀のように家族に見捨てられることもある。

戦後、理想の家族モデルとして「近代家族³¹」が成立していた。しかしバブル崩壊以降、失業の増加³²や非正規雇用の拡大³³などの影響により「近代家族」という理想的家族像は崩れはじめる。未婚化や晩婚化の進行、共働き世帯や離婚率の増加、DVや家庭内暴力の表面化、貧困の世代的継承³⁴、など様々な問題が出てきたのだ。

山田昌弘氏は、このような実態を「家族格差」と呼んでいる³⁵。貧富の格差とともに家族の格差、すなわち家族崩壊が進行し、必ずしも

家族と絆が一致しないことが今日の日本の家族の特徴であるといえよう。

治が子どもに万引きさせたことはさておき、職場でも家でも常に子どものことを想っていた。そして子どもたちに自身が父親として認めてもらいたいとも思っていた。信代と治は、祥太が拾ってきた子どもであることを本人に伝えて育てていたため、祥太は信代と治のことを「おじさん」、「おばさん」と呼んでいる。そこで治は祥太に以下のように話す。

治：ゆり(りん)は、お前の…?

祥太：妹

治：そうだよ、そうさそうさ

じゃあな、俺はお前の…と…とう…

祥太：いい

治：言えよほら、ほら一回ちょっと呼んでみろよって、ほら

祥太：いつかね

治：なんだあ…まいつか、おい

じゃあ、いつかな

(『万引き家族』劇中、下線は筆者)

新しく仲間入りしたりんの存在に慣れない祥太に、彼女が妹であるということ認識させるとともに、自分のことも父として呼んでもらいたいと思っている。このことから、子どもたちと本当の家族のようになりたいと願う彼の気持ちが見て取れる。山田昌弘氏は、現代日本の家族の絆が弱まっているとしながらも「人々が家族的な『絆』を求める欲求は、決して弱まっていない³⁶」と分析しているように、治は親子の絆を求めている。

コロッケ屋：お母さんどう？コロッケ？晩ご飯に

31 岩上真珠氏は近代家族の特徴を、「①生産からの分離(消費の単位としての家族) ②ジェンダーによる固定的な役割分担(「夫は仕事、妻は家庭」と言うイデオロギーの普及) ③夫婦・親子の愛情の協調(情緒性の重視) ④子供中心主義(愛育の対象としての子ども) ⑤家族の集団境界の明確化(核家族化)」とまとめる。岩上真珠『ライフコースとジェンダーで読む家族』(有斐閣、2003年) 59頁より。

32 橋本健二『「格差」の戦後史—階級社旗日本の履歴書』(河出書房新社、2009年) 189頁。

33 岩上真珠(註31) 194頁。

34 橋本健二(註32) 13頁。

35 家族格差とは「①家族が存在しない(例 未婚、離別、死別、子どもなし) ②家族がいても、その家族が助けられるほど強くない(家族意識があったとしても、援助可能な家族がない)(例 非正規共働き、老老介護など) ③家族がいても分け与えない、家族を離脱する(家族意識がない、家族をやめる)(例 虐待、遺棄、離婚など)」である。山田昌弘「家族格差社会」『税制調査会』(2015年7月31日) https://210.149.141.31/zei-cho/content/20150730_27zen15kai5.pdf、14頁(2021年12月3日最終閲覧)。

36 山田昌弘『家族というリスク』(勁草書房、2001年) 3頁。

信代：ふふふふ

祥太：うれしい？「お母さん」って呼ばれて

信代：えー誰に？

祥太：うん…りんとか？

（中略）

信代：なーんでそんなこと聞くんだよ

祥太：え？（治が）呼べって言うからさ「父ちゃん」って

信代：呼べないんだ

祥太：うん、まだね

信代：もうほんとにたいしたことじゃないから。無理しなくていいよ

祥太：うん

（『万引き家族』劇中）

一方、祥太はまだ治を父親として受け入れることができないでいる。ある日、万引きを試みた妹を守ろうとして祥太は怪我を負い、家族は警察に捕まってしまった。そうして、りんの誘拐や初枝の死体遺棄、彼らが本当の家族ではなかったことなど全てが発覚した。

家族は血よりも強い絆で結ばれ、それぞれの痛みを乗り越えていたのだが、社会的には認めてもらえない集団だった。仮に虐待を通報したとして、祥太とりんは救われただろうか。映画ではりんが虐待をする実親に帰されてしまうことから必ずしも救われるとは限らない現実を暗に示している。治は信代の言葉を聞いたその夜、祥太に以下のように話す。

治：父ちゃんさ、おじさんに戻るよ

祥太：うん…

（『万引き家族』劇中）

父親になりたくて、自身のことを「父ちゃん」と呼ぶ治だったが、最後は自分のいるべき本来の位置に戻った。治と別れ、バスに乗った祥太は走って追いかける治を振り返りながら、

声にはならなかったが「父ちゃん」と口を動かした。家族は引き離され、時間を戻すこともできないが、彼らの間には何よりも強い親子の絆が生まれていたことが分かる。

映画で一番伝えなかったことは何だろうか。

以下は警察と信代の会話である。

警察：死体遺棄っていうのは重い罪ですよ、分かってる？

信代：捨てたんじゃない

警察：捨ててるじゃない

信代：捨てたんじゃないんです、拾ったんです誰かが捨てたのを拾ったんです

捨てた人っていうのは他にいないんじゃないんですか？

（『万引き家族』劇中、下線は筆者）

信代の言葉を通して、実の家族に捨てられ、拾ってできた家族が罪に問われる一方で、捨てた人たちを罪に問わない社会に疑問を投げかけている。果たして現代の日本は家族崩壊（別名で家族格差）によって傷ついた人たちが守られ、生きていける社会なのだろうか。

映画では彼らを捨てた人たちを直接描写することはなかった。是枝監督の旧作『誰も知らない』（2004）は、母親に置き去りにされた4人の子どもの姿が描かれているが、公開当時、母親を責める声はあっても、彼らを捨てた父親に注目する声は少なかった。また、長年児童虐待を主題として取り組む作家の天童荒太氏も以下のように話す。

虐待のセンセーショナルな部分に注目が集まる中で、常に母親が責められる。でも、多くの場合、既にそこにいない母と子を捨ててしまった実の父親の存在が語られることは少

ないと感じています³⁷。

現実に捨てられた人たちの悲劇はよく耳にするのに、捨てた人たちが目を向けられることはほとんどない。映画の家族もそうだった。実の家族に捨てられ、地域に捨てられ、社会に捨てられたために、彼らなりの方法で必死に乗り越えようとしただけだった。

経済的には貧しかったかもしれないが、それぞれの存在を見つけた彼らは、精神的には決して貧しくなかった。一緒に食卓を囲み、お風呂に入り、みんなで花火の音を聞き、海で手を繋いで遊ぶ姿は、愛情で包まれた家族そのものだ。

シン・ヒョンソン氏は映画に映し出された家族が、一般的な血縁や法でいう「正常家族」という枠組みを超えて、お互いの傷を癒し合う「包容家族」という概念を打ち出したと評価している³⁸。本作は、家族の崩壊が叫ばれる今日の日本において、今まで当たり前とされ疑われてこなかった家族の本質について考えるきっかけとなっている。

2. 韓国の個人化と家族主義

『パラサイト 半地下の家族』では、韓国特有の家族観が映し出されている。半地下の家族の娘のキジョンは、仕事の座を奪ってしまった元運転手(ユン運転手)の心配をする父のキテクに以下のように話す。

キジョン：私たちが一番問題なんだから、私た

ちの心配だけしてればいいのよ。お父さん、お父さんてば。私たちのことだけ考えて、私たちのこと

ユン運転手じゃなくて、私!頼むから!

(『パラサイト 半地下の家族』劇中、拙訳)

子どもたちは無職の両親の代わりに仕事に就き、さらにもともと働いていた人を罫にはめて辞めさせ、両親の仕事の座を作った。自分の職探しだけでも大変なのに、両親の職まで一生懸命に得る彼らの姿からは、家族主義的な価値観が見える。

韓国には、昔ながらの人間関係を築く精神として「정(情)」と「우리(ウリ³⁹)意識」がある。これらは、家族、親戚、友人、近所などの人付き合いをする際に持つ韓国特有の概念だ。他者への関心は「정(情)」を持っていることであり、同胞意識や一体感を高めて「우리(ウリ)」と呼ぶ。かつての韓国は「정(情)」と「우리(ウリ)意識」でお互いを理解し合い、助け合う社会であった。しかし、1990年代から個人化が進行し⁴⁰、当たり前だった精神が徐々に崩れていった⁴¹。「정(情)」と「우리(ウリ)意識」の繋がりは希薄になり、助け合い、思いやる関係は家族単位に縮小したといえる。「정(情)」と「우리(ウリ)意識」が薄くなったとはいえ完全に消えたわけではなく、親しい間柄や大勢で団結するときなどはその精神が発揮される。ただ、普段の生活の中ではなかなか見えないのが現状である。

37 千葉雄登「虐待が起きるたび、なぜパッシングされるのは母親ばかり?直木賞作家が小説で伝えたい、加害者の切実さ」『BuzzFeed News』(2020年6月23日付) <https://www.buzzfeed.com/jp/yutochiba/tendou-arata-1> (2021年12月7日最終閲覧)。

38 シン・ヒョンソン「가족 개념의 변화, '정상가족'에서 '포용가족'으로- 고레에다 히로카즈의 『증도독 가족』을 중심으로 -」(家族概念の変化、「正常家族」から「包容家族」に—是枝裕和の『万引き家族』を中心として—) (漢陽大学校 (ERICAキャンパス) 日本学国際比較研究所、第45巻、2019年) 166頁。

39 우리(ウリ)は日本語で「我々」という意味である。

40 ホン・チャンスク「한국사회의 압축적 개인화와 젠더범주의 민주주의적 함의- 1990년대를 중심으로」(韓国社会の圧縮的個人化とジェンダーカテゴリーの民主主義的含意—1990年代を中心に—) (韓国女性史学会、17号、2012年) 13頁。

41 チョン・ゲスク、パク・ファチュン、ク・シンシル、キム・ヒョジョン、パク・ヒギョン、ソン・ファンヒ「정(情)과 우리의식에 기반한 따뜻한 교육공동체의 구현방안에 대한 연구」(정(情)と우리意識に基盤した温かい教育共同体の具現法案についての研究) (学習者中心教科教育学会、第18巻第4号、2018年) 862頁。

また、個人化が進んだ現代の韓国人の実態についてソン・スンヨン氏は「利己的な個人の目的が家族単位で形成され強化されている⁴²⁾」と説明する。すなわち「自分のため＝家族のため」という考え方である。映画に出てくる家族には、この韓国的な個人化と家族主義が投影されているといえよう。さらに半地下の家族の場合、他者を貶めてまで家族を優先していたことから、排他的な家族主義⁴³⁾であることが分かる。

助けを求める地下の夫婦を半地下の家族は見捨て、最終的に殺し殺される悲劇を迎えた。家族は助け合い、思いやるのに、他者には限りなく冷たい現実を批判している。

3. 彼らをつくり出した社会

『万引き家族』の家族は、家族崩壊によって捨てられた(傷ついた)人たちの集まりであり、彼らを捨てた人たちに目を向けない日本社会が明らかになった。そして『パラサイト 半地下の家族』では韓国の強力な家族主義を映し出していた一方で、個人化の進行と思いやりの精神の希薄化も映し出されている。格差社会で生きるということは「家族」のかたちも変わっていくことを物語っている。

おわりに：社会と向き合うために

これまで『万引き家族』と『パラサイト 半地下の家族』に映し出された問題を浮き彫りにし、比較を行った。「誰にも頼れない」という状況が当たり前になり、「誰にも頼らない」という生き方になってしまった『万引き家族』と、超えられない階級格差を知ってもなお夢見る『パラサイト 半地下の家族』は、それぞれ

の社会を端的に表している。そしてこのような社会を生きる「家族」の実態についても明らかになった。

『パラサイト 半地下の家族』では、階級社会でいっそう強くつながる家族像を投影していた一方で、『万引き家族』では、従来の家族が崩れ、「孤族」に変化した社会に生きる人々の現実を描いていた。

『万引き家族』と『パラサイト 半地下の家族』で決定的に異なるのは他者の存在である。

『パラサイト 半地下の家族』はメインの貧困層の家族のほか、富裕層の家族ともうひとつの貧困層の家族が登場する。格差社会の問題を映し出すうえでポン・ジュノ監督は他者との比較を扱ったのだ。これにより、富裕層、中産層、貧困層まであらゆる観客が自分を登場人物の誰かに代入して考えることができた。映画公開後は、半地下住宅、自営業をして転落した貧困層など、描かれた問題について、メディアだけでなく多くの人々が注目した。『万引き家族』では、本論で述べたように社会と家族から見放された人々を映し出し、「見放した側」の存在は描かれていない。

映画で見放された人々は、擬似家族として集まって暮らしたが、家族ごっこも束の間で、社会では許されず、存在も認められず、バラバラに引き離されてしまった。犯罪と祖母(の役割)の年金に寄生することでつながっていたが、そこには確かに絆があった。家族ごっこの終わりは、ある意味現実的なラストだといえる。孤族社会の中、「家族」や「孤立」の問題について今一度向き合う必要があると考える。

どちらも今まで見て見ぬふりされたり、見えづらかった人々を可視化したことで、世界中で高く評価されたが、国内の評価は全く異なるものだった。『万引き家族』が日本国内で公開されてから18日後、自民党の幹事長は都内の講演で日本の貧困問題について「今は食べるのに困

42 ソン・スンヨン「한국의 가족주의와 사회적 과시-지속과 변화-」(韓国の家族主義と社会的誇示—持続と変化—)(韓国社会歴史学会、第9巻第2号、2006年)250頁。

43 ソン・スンヨン(註42)268頁。

る家はない。こんなに素晴らしい、幸せな国はない⁴⁴」と述べた。同じ時期に日本の貧困層の現実を暴露した映画が公開され、一方では「素晴らしい、幸せな国」という発言がなされることに違和感を覚えるが、本論で浮き彫りにした問題を見ても決して（誰にとっても）「幸せな国」とは言えない。

また、祥太とりんは保護（誘拐）された関係で学校に通えなかったが、無戸籍、不就学の問題が実際にあるにも関わらず、「そんな問題はない」などと言い張る議員がいるなど、「見えない」人々を「いない」と断言してしまう空気があり、映画では映し出されなかった「見放した側」の存在は現実社会で浮き彫りになった。

同じ年金の不正受給の事件（2011年の事件）を題材にした2013年の小林監督の映画『日本の悲劇』から2018年の『万引き家族』まで、日本はどう変わったのだろうか。年金の不正受給の問題について、依然として解決の兆しが見えないのは「孤立」する社会という背景と密接な関係があるため、問題は根深い。

映画に関しても、社会の問題と向き合ういわゆる「社会派」映画は、日本では注目を集めにくい。受賞でもしなければ多くの人には観られない。『万引き家族』はパルム・ドールを受賞したことで、国内でも注目を集めた。しかし日本社会は映画に映し出された問題にいまだに向き合うことができていない。映画だけでなく、メディアにおいても朝日新聞が10年前から「孤族」の特集を組むなど、社会の変化をいち早く取り上げて問題視しているが、いくらメディアが騒ごうと、研究者が必死に訴えようと、人々は見たいものしか見ない。政府は見ても見ぬふりをする。「孤族」という言葉が現れて10年。10年経っても何も変わらないどころか、

ますます問題は「他人事」、「自己責任」と片づけられてしまう、それが今の日本社会だといえよう。

韓国では、1987年の民主化運動以降、国民は事あるごとに、本音でぶつかり合ってきた。批判を率直に受け入れることで（その批判が時には行き過ぎることもあるが）、より良い社会にしようと、声をあげてきた。

ろうあ者施設で実際に起きた事件を世の中に暴露した映画『トガニ 幼き瞳の告発』（2011）は、事件の再調査および「トガニ法」という法の制定にまで影響した。声を出せない人々の声を映画で可視化し、それを観た人々が怒り、立ち上がった結果である。各国で大ヒットしたフェミニズム小説『82年生まれキム・ジョン』（筑摩書房、2018年）は文壇を超えて社会 이슈となった。また、『パラサイト 半地下の家族』が韓国の格差社会を端的に表したとするならば、失業者、脱北者、前科者、外国人労働者、暴力団員などを描いたドラマ『イカゲーム』（2021）も世界的なヒットを記録したとともに、韓国のあらゆる社会的弱者を浮き彫りにした。社会派映画からドラマ、K-POP、と韓国の声はいまや国内を超えて世界に響いている。

『パラサイト 半地下の家族』を観た人々は映画が自分ごとのように感じた人々が多かった。辛い事実、今まで言えなかった現実を、映画が代弁し、国民、いや世界中の観客が共感し、納得した。

日本では、映画、メディア、研究者が、問題提起をして、それがいくら正論だとしても国民全体で受け止める、という空気はない。むしろ批判してはいけない、ものを言ってもいけない雰囲気と同調し、何も言えない、指摘できない社会になってしまっているのではなからうか。

『万引き家族』について、日本国内では「犯

44 「自民・二階俊博幹事長『子供を産まない方が幸せだと勝手なこと考える人がいる』」『産経新聞』（2018年6月26日付）<https://www.sankei.com/politics/news/180626/pli1806260029-n1.html>（2021年12月8日最終閲覧）。

罪を擁護するのか、彼らは自己責任だ⁴⁵」などという声もあがったが、日本社会の問題を「自己責任」と片づけ、逃げてばかりいては、より良い社会に向かうどころか、一生このまま変わらないと考える。

『パラサイト 半地下の家族』は、ムン・ジェイン大統領が、「『パラサイト 半地下の家族』が映し出した社会意識に深く共感する⁴⁶（拙訳）」と発言したり、与野党でも「我々の社会の貧富の格差と両極化、社会的階層の固着化など、当面した問題についても目を逸らさず積極的に対処すべき」、「不平等国家の大韓民国を改革する時⁴⁷」などというコメントがあがったりするなど積極的に受け止める姿勢が見られた。市民だけでなく、国レベルで映画に映し出された問題を重く受け止めている点が日本と大きく異なる。

多くの人（国民）に自分事として受け止められた『パラサイト 半地下の家族』と他人事として受け止められてしまった『万引き家族』であるが、映画が映し出した社会が架空のものでなく、今自分たちが暮らしている社会だということ忘れてはならない。

また現在、2019年12月に中国の武漢を発端に全世界で広がり続ける新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の収束の兆しが見えない。その影響でリストラや収入減に直面する人が増加

している⁴⁸。橋本健二氏は「このまま放っておくと、格差拡大が加速する⁴⁹」と危惧する。さらに格差が広がるとともに、差別や偏見も生まれている。経済的支援や制度的な対応も必要だが、人々の意識も問われる時代である。

このような時期だからこそ、2つの作品から学べることはないだろうか。それでも「恥」や「自己責任」と言えるのか。我々が生きる社会の現実を認識するためには、問題と向き合わなければならない。『万引き家族』と『パラサイト 半地下の家族』は今私たちが生きていく格差社会と向き合う手掛かりになると考える。

参考文献

〈映像資料〉

- ・『万引き家族』（2018）AOI Pro.
- ・『기생충』（パラサイト 半地下の家族）（2019）Barunson E&A
- ・『NHKスペシャル 消えた高齢者“無縁社会”の闇』（2010年9月5日）NHK
- ・『マイ・ディア・ミスター～私のおじさん～』（2018）スタジオドラゴン
- ・「日韓から『家族』を描く 是枝裕和×ボン・ジュノ」（2019年10月12日放送）日本映画専門チャンネル

〈日本語図書〉

- ・是枝裕和（2018）『万引き家族』宝島社
- ・春木育美（2020）『韓国社会の現在』中央公論新社
- ・安宿緑（2020）『韓国の若者—なぜ彼らは就

45 クローズアップ現代「是枝裕和×ケン・ローチ “家族”と“社会”を語る」【NHK】（2019年9月17日付）<https://www.nhk.or.jp/gendai/articles/4325/index.html>（2021年12月8日最終閲覧）。

46 イ・サンギョ「文在寅大統領、ボン・ジュノと午餐、出した食事は「チャパグリ」…料理師は？」（문재인 대통령 봉준호와 오찬, 내놓은 음식은 '짜파구리'...요리사는?) 『毎日経済』（2022年2月21日付）<https://m.mk.co.kr/news/society/view-amp/2020/02/179091/>（2021年12月12日最終閲覧）。

47 チャン・ウンジ「기생충' 4 관왕 정치권 들썩...'양극화 해결 나서야」(両極化解決するとき) 『news 1』（2020年2月10日付）<https://www.google.co.jp/amp/s/www.news1.kr/amp/articles/%3f3838404>（2021年12月4日最終閲覧）。

48 木代泰之「コロナ危機が映す格差社会～社会的弱者に犠牲をつけ回すな！人種、職業、世代、ITデバイド。災害ではまず弱者が犠牲になる」『朝日新聞』（2020年4月12日付）<https://webronza.asahi.com/business/articles/2020041100002.html?page=2>（2021年12月22日最終閲覧）。

49 当銘寿夫「日本人は「格差拡大」の深刻さをわかっていない—コロナ禍で貧困層の雇用や教育環境が一層悪化」『東洋経済』（2020年6月30日付）<https://toyokeizai.net/articles/amp/359752?display=b&event=read-body>（2021年12月14日最終閲覧）。

職・結婚・出産を諦めるのか』中公新書

- ・金敬哲（2019）『韓国 行き過ぎた資本主義—「無限競争社会」の苦悩』講談社現代新書
- ・岩上真珠（2003）『ライフコースとジェンダーで読む家族』有斐閣
- ・橋本健二（2009）『「格差」の戦後史—階級社旗日本の履歴書』河出書房新社
- ・山田昌弘（2001）『家族というリスク』勁草書房

〈外国語論文〉

- ・イ・スジョン（2020）「〈설국열차〉와 〈기생충〉에 나타난 계급모순의 극복방식 - 프레드릭 제임슨의 서사이론을 중심으로 -」（〈스노피어サー〉と〈パラサイト 半地下の家族〉に現れた階級矛盾の克服方式—フレドリックジェームソンの叙事理論を中心として—）芸術科メディア学会、19巻1号
- ・シン・ヒョンソン（2019）「가족 개념의 변화, '정상가족'에서 '포용가족'으로- 고레에다 히로카즈의 『좀도둑 가족』을 중심으로-」（家族概念の変化、「正常家族」から「包容家族」に—是枝裕和の『万引き家族』を中心として—）漢陽大学校（ERICAキャンパス）日本学国際比較研究所、第45巻
- ・ホン・チャンスク（2012）「한국사회의 압축적 개인화와 젠더범주의 민주주의적 함의-1990년대를 중심으로」（韓国社会の圧縮的個人化とジェンダーカテゴリーの民主主義的含意—1990年代を中心に）韓国女性史学会、17号
- ・チョン・ゲスク、パク・ファチュン、ク・シンシル、キム・ヒョジョン、パク・ヒギョン、ソン・ファンヒ（2018）「정(情)과 우리의식에 기반한 따뜻한 교육공동체의 구현방안에 대한 연구」（정(情)とウリ意識に基盤した温かい教育共同体の具現法案について(の研究) 学習者中心教科教育学会、第18巻第4号
- ・ソン・スンヨン（2006）「한국의 가족주의와 사회적 과시-지속과 변화-」（韓国の家族主義と社会的誇示—持続と変化—）韓国社会歴史学会、第9巻第2号

〈新聞〉

- ・真鍋弘樹「孤族の国 家族に頼れる時代の終わり」『朝日新聞』（2010年12月26日付け）2面
- ・「孤族の国 第一部男たち」『朝日新聞』（2010年12月26日付け）2面

〈インターネット資料〉

- ・キム・ギョンファ「[同じ日本、違う日本] 社会派不在の日本映画界に自省のきっかけ、ボン・ジュノの'寄生虫(原題)」（[같은 일본, 다른 일본] '사회파' 부재의 일본 영화계에 자성의 계기, 봉준호의 '기생충')」『韓国日報』（2020年2月19日付）<https://m.news.zum.com/articles/58207367>（2021年12月15日最終閲覧）
- ・「봉준호 감독 "'기생충'은 양극화를 다루는 영화"」（ボン・ジュノ監督「『寄生虫(原題)』は両極化を扱う映画」）『毎日経済』（2019年5月21日付）<https://www.google.co.jp/amp/s/m.mk.co.kr/star/hot-issues/view-amp/2019/05/334323/>（2021年12月20日最終閲覧）
- ・筒井富美「"万引き家族"よりヤバい"年金タカリ家族"「寝たきりの親」を飯のタネにする」『PRESIDENT Online』（2018年6月8日付）<https://president.jp/articles/-/25364>（2021年11月14日最終閲覧）
- ・「111歳男性、実は30年前に死亡？足立区でミイラ化遺体」『日本経済新聞』（2010年7月29日付）<https://www.nikkei.com/article/>

- DGXNASDG2901S_Z20C10A7000000/ (2021年11月14日最終閲覧)
- ・ 足立の「111歳」事件、長女・孫を逮捕 年金不正受給の疑い」『日本経済新聞』(2010年8月28日付) https://www.nikkei.com/article/DGXNASDG2704Q_X20C10A8CC1000/ (2021年11月14日最終閲覧)
 - ・ 「「年金止まったら生活できない」母の遺体放置、遺棄容疑で65歳息子逮捕」『産経新聞』(2020年11月10日付) <https://www.sankei.com/west/news/201110/wst2011100005-n1.html> (2021年12月9日最終閲覧)
 - ・ 池上正樹「父の遺体放置に年金不正受給で逮捕、「引きこもり」58歳息子の複雑な胸中」『DIAMOND online』(2020年8月7日付) <https://diamond.jp/articles/-/245183> (2021年12月9日最終閲覧)
 - ・ チェ・ピルソン、ミン・インシク「父母の教育と所得水準の世代間移動性と機会不平等に与える影響」(부모의 교육과 소득수준이 세대 간 이동성과 기회불균등에 미치는 영향) (東國大校『社会科学研究』第22巻第3号、2015年) <http://www.dbpia.co.kr/Journal/articleDetail?nodeId=NODE06527108#none> (2021年12月4日最終閲覧)
 - ・ ホン・ソクジェ「階級移動はしご」揺れたか…SKY在学学生半分が高所得層」(‘계층 이동 사다리’ 흔들렸나…SKY 재학생 절반이 고소득층) 『ハンギョレ』(2018年10月29日付) http://www.hani.co.kr/arti/society/society_general/867774.html#csidx403a41f8641d4b0ac1797ace8a3e27d (2021年12月1日最終閲覧)
 - ・ カン・ジュファ「[세상만사-강주화] 지하철 냄새 나는 사람들」([世界万事-カン・ジュファ] 地下鉄の匂いがする人たち) 『国民日報』(2019年5月31日付) <http://m.kmib.co.kr/view.asp?arcid=0924081083> (2021年12月9日最終閲覧)
 - ・ パク・ヨンベ「ソウル交通工事、「2020年輸送人数分析結果」発表…輸送人数27%減少」(서울교통공사,「2020년 수송인원 분석결과」 발표...수송인원 27% 감소) 『The Drive』(2021年1月28日付) <https://m.thedrive.co.kr/news/newsview.php?ncode=1065586637929817> (2021年12月3日最終閲覧)
 - ・ ユン・インギョン「기생충: 반지하에 사는 청년들」(寄生虫(原題): 半地下に暮らす青年たち) 『BBCニュース 코리아』(2020年2月8日付) <https://www.bbc.com/korean/news-51320987.amp> (2021年12月1日最終閲覧)
 - ・ 山田昌弘「家族格差社会」『税制調査会』(2015年7月31日) https://210.149.141.31/zeicho/content/20150730_27zen15kai5.pdf, 14頁 (2021年12月3日最終閲覧)
 - ・ 千葉雄登「虐待が起きるたび、なぜバッシングされるのは母親ばかり? 直木賞作家が小説で伝えたい、加害者の切実さ」『BuzzFeed News』(2020年6月23日付) <https://www.buzzfeed.com/jp/yutochiba/tendou-arata-1> (2021年12月7日最終閲覧)
 - ・ 「自民・二階俊博幹事長『子供を産まない方が幸せだと勝手なこと考える人がいる』」『産経新聞』(2018年6月26日付) <https://www.sankei.com/politics/news/180626/pl1806260029-n1.html> (2021年12月8日最終閲覧)
 - ・ クローズアップ現代「是枝裕和×ケン・ローチ “家族” と “社会” を語る」『NHK』(2019年9月17日付) <https://www.nhk.or.jp/gendai/articles/4325/index.html> (2021年12月8日最終閲覧)
 - ・ イ・サンギョ「文在寅大統領、ポン・ジュノと午餐、出した食事は「チャパグリ」…料理師は?」(문재인 대통령 봉준호와 오찬, 내놓은 음식은 '짜파구리'...요리사는?) 『毎日経済』(2022年2月21日付) <https://m.mk.co.kr/>

news/society/view-amp/2020/02/179091/ (2021年12月12日最終閲覧)

- ・チャン・ウンジ 「'기생충' 4관왕 정치권 들썩 ..."양극화 해결 나서야"」 (両極化解決するとき) 『news1』 (2020年2月10日付) <https://www.google.co.jp/amp/s/www.news1.kr/amp/articles/%3f3838404> (2021年12月4日最終閲覧)
- ・木代泰之 「コロナ危機が映す格差社会～社会的弱者に犠牲をつけ回すな！人種、職業、世代、ITデバイド。災害ではまず弱者

が犠牲になる」 『朝日新聞』 (2020年4月12日付) <https://webronza.asahi.com/business/articles/2020041100002.html?page=2> (2021年12月22日最終閲覧)

- ・当銘寿夫 「日本人は「格差拡大」の深刻さをわかっていないーコロナ禍で貧困層の雇用や教育環境が一層悪化」 『東洋経済』 (2020年6月30日付) https://toyokeizai.net/articles/amp/359752?display=b&_event=read-body (2021年12月14日最終閲覧)